

## 児童図書館研究会における児童図書館員養成の変遷

鈴木のぞみ

児童図書館員とは、児童サービスを通して子どもと本を結ぶ図書館員のことである。児童サービスは子どもを主な対象とした図書館サービスであり、子どもに読書の楽しみを伝えることやそれを通じて子どもの人間的な成長を支援することを目的として行われる。この目的を達成するために、児童図書館員には子どもの発達段階に応じたサービスや、読み聞かせなどの子どもに対する働きかけが求められる。そのため児童図書館員には子どもや児童資料、読み聞かせなどの子どもと本を結ぶ方法に関する知識や技術が求められている。本研究では児童図書館員の人材育成について、児童図書館員に求められてきた知識や技術を考察することを目的とした。

本研究では、戦後日本の公共図書館における児童サービスを牽引してきた児童図書館研究会の人材育成事業に着目し、文献調査を行った。具体的には、児童図書館研究会の活動を中心に日本の児童サービスの歴史を論じた文献である『児童図書館のあゆみ』、児童図書館研究会機関誌『こどもの図書館』を対象として、人材育成について分析を行った。

児童サービスは、終戦後図書館サービスの中で重視されない時期が続いていたが、『市民の図書館』の刊行をきっかけに普及・発展した。1980年代から1990年代にはサービスが多様化し、現在では子どもの読書離れの問題から、国の子どもの読書活動を推進する動きの中に位置づけられた。児童図書館研究会の活動は児童サービスや児童図書館に関する研究から、徐々に児童サービス全般や個々のサービス、子どもに関する学習に発展し、活動の場は東京から全国各地の支部へと広がった。

また、児童図書館研究会の人材育成事業は東京から全国各地に広がり、内容は児童資料や子どもと本を結ぶ方法を中心としたものから、児童図書館員の専門性の確立を目指した児童サービス全般に関するものや子どもに関するものへと変化していった。

児童図書館員の人材育成は、児童サービスの発展や子ども観の変化などを反映させながら発展してきた。児童図書館員に求められる知識や技術のうち、その核となるものは、児童資料に関する知識や子どもと本を結ぶ方法である。時代や子ども観の変化や児童サービスの発展と共に、この核に児童室運営の実務に関する知識や技術、多様化した個々のサービスに関する知識や技術、子どもに関する知識が求められるようになってきたことが明らかになった。

(指導教員 呑海沙織)